

研修部だより

帯広市立啓北小学校

NO.6 令和5年6月2日(金)

文責 高平

テーマ「提案研を終えて」

授業者：6年2組 石川先生

国語 説明文 6年「時計の時間と心の時間」

国語部会では、5月22日(金)に石川先生が授業を公開してくれました。前時までに捉えた要旨を、交流を通して、より良いものに修正することがメインの活動となりました。今年度からの取組である「ラーニングマウンテン」を用いて、常にゴールを意識させながら、単元の中で着実に力を積み重ねている様子が随所に見られました。一人一人が自分の課題を解決するために、友達と交流しながら学習を深める姿、その姿をしっかりと見取り、授業の中で価値づけて生かそうとする石川先生の細やかな指導が見られた1時間でした。

柱1 見通しと振り返りの工夫



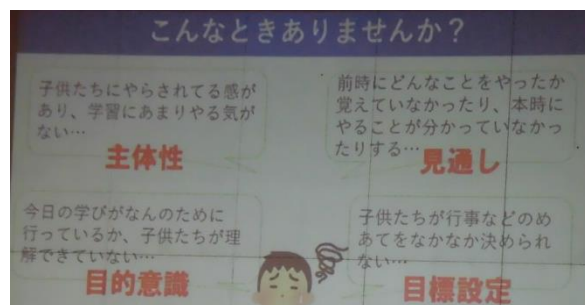
内容①ラーニングマウンテンによる見通しの共有

子どもの学びの様子を思い描く

「何のために学習しているんだっけ?」とゴールを確認

「石川先生が子どもたちに本時の課題を聞いた時、一人一人が自分の要旨の課題を言えていたことがすごい!」という感想がありました。子どもの発言やワークシートなどからも「これまでに明確な意図をもって指導してきたことが分かる」といった声もありました。

パネルディスカッションの中で石川先生は、単元をつくるポイントを「伏線」という言葉で表現していました。この「伏線」を張るためには、ゴールまでに子どもたちが学んでいく様子を具体的に想像する必要があります。石川先生は、指導案とは別に、単元の詳細(1時間ごとの活動やポイント)も作成していました。事前の教師側のしっかりとした準備が、着実に力をつけていく指導につながると感じました。



子どもたちが自分で頂上を意識できるようになっていくためには?

子どもたちが見通しをもって学習を進める姿をゴールとしたとき、「どこまで学習の進め方や、順序を子どもたちに選択させるかがポイントになる」という意見がありました。樺山教授からの助言の中に、「今日は、どんなことを(どのように)学びたいですか?」と聞くとよいという話がありました。教師が子どもたちの声を受け止める姿勢や、自己選択させる機会をつくっていくことが大切だと感じました。

また、樺山教授は、単元の導入で「やってみたい!」という子どもの意欲を高めることについても話されていました。そのためには、「面白そう!」と思えるような言語活動を考えたり、「教材を読んでもみたい!」と思えるような導入の工夫をしたりすることが山登りの意欲につながりそうです。今後、そうした先生方の工夫も交流できたらいいなと思います。

柱II かわい合いを活性化させるしかけ

内容② かわい合うための3つのしかけ

交流の視点をもたせる



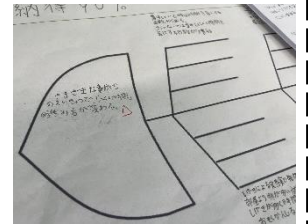
何を書いているかを見て指導に生かす



本時では、10分ほどの自由形式での交流がメインでした。今回のしかけは、「追加・変化・強化」という視点をもたせる発問のしかけでした。参観された先生方からは、「交流によって自分の課題を修正できた子が多く見られた」という成果や、「追加・変化・強化という交流の視点をもたせたことが有効だった」という声が多くありました。また、交流を自由形式にすることで、子どもを見る時間が確保できたことも良かったと思います。石川先生が一人一人に時間をかけて指導したり、交流の内容を踏まえて意図的に指名したりする場面も見られました。他にも、要旨を書くために、主張と事例を整理するための思考ツール「フィッシュボーン」を教材のしかけとして取り入れました。関わって、以下のような質問があったのでお答えします。

Q フィッシュボーンを使ってみてどんな効果がありましたか？

A 今回だとあまり効果はありませんでしたが、「主張と事例を使って筆者が言いたい」という構図が分かりやすいので、今後の説明文の授業で繰り返し使っていくと、効果も出てくると願っています。



全員が「よりより要旨になった」と言えるようにするためには？

全体的に成果を感じられた一方で、榊山教授からは、「一人一人の要旨を見た時に、全員が目標に達していたのか」という問いかけがありました。先生方から「どの課題の人が、どの3つの視点をもつとよいのか子どもが分かる」という意見がありました。他にも、「前時ですでに3Zに合う要旨を書けていた子ども交流する必要感を生むには、困っている人にアドバイスをしたり、もう一つ書いて比べたりするとよい」という意見もありました。全員に力をつけさせるって難しいですね…。

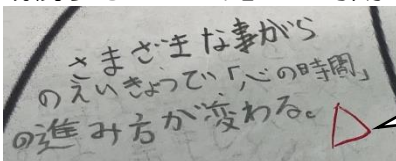
柱III 個の学びの充実

内容③ ラーニングマウンテンによる学びの自覚化

自己評価と他者評価



石川先生は、単元を通してフォームを使った“自己評価”をさせていました。マウンテンのたしかめとリンクさせながら、今日の学習の理解度を◎○△で評価し、理由も記述させていました。フォームを活用したことについて、「自分の振り返りを見ることができてよい」「蓄積して残すことができる」といった意見があり、有効な手段であると感じます。榊山教授からは、先生による“他者評価”も大切だというお話もありました。子どもたちのワークシートに○や△が書いてあり、石川先生が子どもたちにきちんと読み取れているかを評価していることがわかります。低学年など、まだ自分を客観視することが難しい時期には、教師からしっかり伝えてあげる必要があると感じました。



筆者の主張が読み取れているかを評価

【振り返り】

・自分の要旨と比較して今回の要旨はどうだったか？

→◎ ○ △ +理由

子どもたちと明確なB規準を共有する

自己評価が甘い、厳しいをなるべくなくし、客観的に自分を振り返るために、B規準の共有がカギになってくると思います。B規準の設定には、教科書の「たいせつ」=公式をおさえること、その公式を“教えて”習得させる意識が必要だそうです。